

## 生き物の拒否権を蹂躪するな

生き物の拒否権を蹂躪するな。自然の進化過程を越えるような技術の使用は生き物と自然に対する著しい冒涇、侵害である。遺伝子研究には許容の明確な範囲がある。その範囲を越えて、やってはいけないことをするのは科学ではない。科学者は興味あることを好奇心で何でもする。これは許容され、むしろその本性を支えてもいる。しかし、生き物が拒否しているような閾値を超えて、遺伝子操作を喜々得々とするのは、許されない行為である。人類のためなどと虚偽の免罪符はあり得ない。名誉心を満たし、金を獲得するためにうそを言っているのであり、科学をする心からではない。できるからと言って、生き物や自然にとっての毒物を作ることに技術的に応用してはいけない。このようなことを、己の欲得でなすのは、生き物と自然に対するおぞましい犯罪である。生き物が進化の過程で属間雑種を作ることにはあったが、科を越えてまで遺伝子交換することはほとんどありえない。遺伝子操作は界まで越えてなされるのは自然の過程では拒否される事象であって、技術的に可能であっても、してはならないことだ。自然に対する信仰心を失った狂気であり、科学する心と言うことができない。自然の一員であり、高度な文化的進化をしてきた動物ヒトとして恥を知るべきだ。

技術が拡大してきた「便利」は暮らしを助けて、とてもありがたいものだ。しかし、これに浸り、溺れると、動物ヒトは取り換えの効く消耗品として機械の一部品になる。意思ある生き物として進化したヒトが、生命を生きることを拒否される。

奥多摩湖、深山橋のほとりで、目前を小菅の湯に向かって通り過ぎたバスの戻りを待って、1時間余りを寒さに震えながら佇んでいた。暗闇の高空を轟音響かせて旅客機が7機も飛び去って行った。時たま通り過ぎる自動車は、「乗せてあげようか」と止まる気配はない。もちろん、私だって言えないほど、人を信じられない情けない世情だ。30年ほど前、自然観察センターを訪問した際に、サンフランシスコの金門橋に向かう道で、スバルに乗せてくれた若いアメリカ人女性の素朴な親切が忘れられない。ここ日本でもすでに失われた親切な行為である。便利な機械に身をゆだねた人々は、生き物も、人々も、山里も見ることはない。(2015-1-23)